

## 2020年ゴリ資源の現況把握調査

大前信輔・太田滋規・大植伸之・松田直往

## 1. 目的

ヨシノボリ類稚魚の通称である“ゴリ（ウロリ）”は琵琶湖の重要な水産資源の一つである。ゴリ漁は7月20日に解禁となるため、その漁期直前の8m前後の漁場での生息状況を評価することを目的とした。

## 2. 方法

7月17日にゴリの主要漁場である薩摩地先（水深7m）および松原地先（水深8m）、沖島地先（水深8m）において採集調査を行った。ビームトロール網（ビーム長3m、袋網目合1.4mm）を使用し、約1.5km/hで6分間曳網（約150m）した。また、携帯型GPSにて曳網開始地点と終了地点を記録した。採集したサンプルは現場にて10%ホルマリンで固定し、試験場に持ち帰ってソーティングを行った。発育段階初期の体型が小さく、種判別困難なハゼ類をゴリとして計数した。

携帯型GPSの記録から曳網距離を計測し、ビーム長を乗じた曳網面積1m<sup>2</sup>当たりのゴリの生息密度（尾/m<sup>2</sup>）として評価した。

## 3. 結果

2020年の結果を図1に示す。松原地先は8.7尾/m<sup>2</sup>、薩摩地先は22.4尾/m<sup>2</sup>、沖島地先は6.2尾/m<sup>2</sup>であり、薩摩地先が最も高かった。

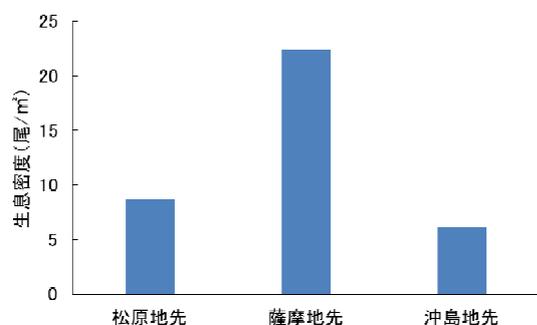


図1 2020年の地点別生息密度

地点別に過去との比較結果を示す。松原地先では昨年より減少し、2017年以外の各年と同様に20尾/m<sup>2</sup>以下であった。薩摩地先では昨年より増加し、2016年および2017年並みの水準となった。沖島地先では昨年と同様であり、2016年以降減少傾向が続いている。

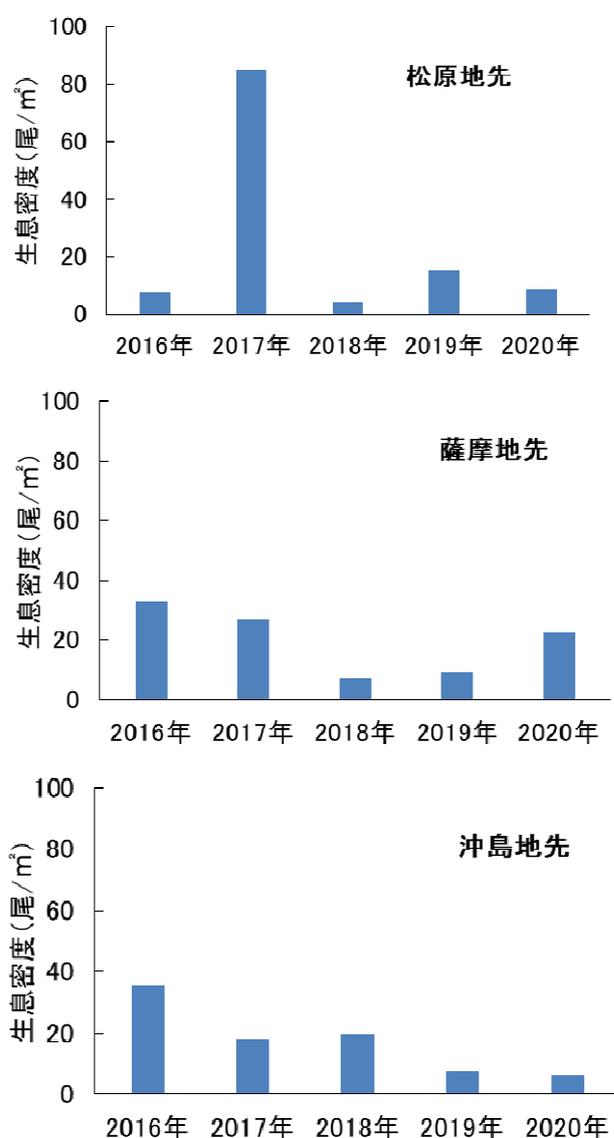


図2 地点別生息密度の経年変化